

「婚活」活発化もカップルの不成立目立つ

認識・境遇のズレを見る

晩婚化が叫ばれる中でも、独身者は決して結婚をあきらめたわけではなく、「婚活」が花盛りだ。そして異性との出会いに昔から駆け引きはつきものだが、近年はその「力学」に変化が生じ、カップルになれないケースが目立ってきているという。パートナー探しに苦労する男女をつぶさに見ると、両者の認識と置かれた境遇のズレが浮かび上がってくる。

「恋のキューピッド」
近藤さんの取り組み

■女性にフラれる男性続出

豊橋市天伯町の、とある一軒家。部屋の中で向き合っている座る男性(37)と女性(33)は初対面。お互いに緊張した空気が漂うのは、これがお見合いの場面だからだ。

同席している年配女性がぎこちない2人に話を振り、場を和ませる。だいたい打ち解け笑顔ものぞくようになったところで、「伊良湖岬に恋人の聖地があるのよ。今から行ってみれば」と提案。「大人同士なんだから、メアド交換は自分たちでやってね」と言い添える。2人は照れながら初デートに出かけて行った。

お見合いを設定したのは、この家の住人の近藤百合子さん(83)。30代のころからお見合いの世話をしてきたといい、成婚は数知れず。数年前から仲間とグループを作り、結婚を希望する男女のプロフィールをより多く集めて週末を中心にお見合いをセッティングする。

もたらされる独身者の情報は、たいてい口コミ。お見合いを希望する人には簡単な自己紹介を記した身上書を提出してもらい、グループのメンバーで釣り合う相手を探して紹介する。考慮するポイントは年齢や学歴、背格好、勤め先、家柄など。

束になった身上書を見ると男性は30〜50代、女性は20〜50代。なかなかカップルが成立しない人も多く、お見合いを繰り返すこと13回という女性もいるという。パラパラとページをめくり、近藤さんはため息をつく。「20年前までは、男性が気に入れば女性もたいていOKだったんだけどね」。今では男性が乗り気でも、女性側から断るケースがほとんどだという。

クローズアップ

男女の「力学」に変化



豊橋市役所で昨年12月に開かれた結婚支援セミナー。講師の話を真剣に聞く男性受講者

男性が「選ばれる」時代に

男性がフラれる理由は様々。「おとなし過ぎる」「話題がつまらない」というコミュニケーション能力に関するものから、服装がダサいとか軽乗用車に乗っているのがイヤという女性もいたという。近藤さんは「特に高学歴の女性は小言が多い」と嘆く。相対的に立場が弱くなった男性には同情的だ。「大変だと思うよ、男性は。デートでお金を使って、おせじを言ったために頭も使った」。

■婚活セミナーで猛勉強

いずれにせよ男性が選ぶ時代から、選ばれる時代へ。女性の心をつかむには、どうすれば良いのか1人ひとりが模索を始めていく。昨年12月、豊橋市が主催し、市役所で開かれた結婚支援セミナー。婚活の専門家の話に、神妙な面持ちで聞き入る独身男性たちの姿があった。

30代を中心とする受講者に、講師は熱心に訴えかける。「コミュニケーションが一番大事なのはアイコンタクト。しゃべっている人を見ないと、絶対に距離は縮まらない」。そんなごく当たり前と思える内容にも、みんな素直にうなずきながらメモを取る。

会話のコツにも話は及び「女性は皆さんから話しかけられてナンボ。自分から話しかけることを常に心がけて」とのアドバイス。「でも、自分の話ばかりしてはダメ。相手の話を引き出し、共感できるかどうか大事なんです」。

セミナー後のアンケートでは「危機感が足りないと感じました」「自分を変えよう」という気持ちになりましたなどの感想がみられた。女性に慣れていない男性に、意識変革を促す学びの場となったようだ。

■結婚観と経済状況にズレ

男性に求められるのはコミュニケーション能力だけではない。年間60回以上の婚活イベントを企画する結婚相談所「チアーズ」(豊橋市)の松尾篤代表(34)は、将来をより現実的に考えようとする女性の特性によって、男性が選別されているとみる。

結婚適齢期を迎えている女性たちの両親の多くは、いわゆる「団塊の世代」。夫が外でバリバリ働き、妻は主婦の仕事に専念する家庭環境が当たり前だった時代で、そこで育った女性の多くは「妻は家にいるもの」という観念を知らず知らずに抱き、それを可能にする経済力を結婚相手に求めるのだという。

しかし現実には、長引く景気低迷や非正規雇用の増加で男性の稼ぎは減る一方。松尾さんは「女性の結婚観と男性の経済状況にズレが生じてしまっている」と、婚活が難航する原因を分析する。

(中嶋真吾)

意識改革へ専門家が結婚支援セミナーも